

巻 頭 言

St. Paul's Librarian のリニューアル第一号をお届けいたします。本誌は、立教大学の司書課程での学びの報告を中心とした年報として出版されています。図書館実習に関連する各種の報告、授業で提出された優秀レポート、卒業生からのメッセージが、長年、本誌の核となっています。内容には、昨年度に、司書課程の行事報告と専任教員の研究活動報告を加えました。本年度は、課程の修了生の就職活動体験記を加える等、内容をさらに拡充するとともに、判型とデザインを一新いたしました。また、昨年度号分から、本学の学術リポジトリ、立教 Roots で全面的に無料公開をすることになりました。一方で、“Librarian”をタイトルとして冠することが、図書館情報学を基盤として、司書に限らず、図書館・情報専門職を養成しようと考えている私たちの課程の教育・研究活動の年報としてどうだろうという議論も、専任教員2名の間ではありましたが、これについては、決断を先送りにしました。占領下の教育改革において、学校教育・社会教育の専門職の養成の大学への移行が取り組まれ、司書もそれに含まれたわけですが、60年が過ぎて現状を見ると、改めて、日本社会における専門職とその養成のあり方に関わって、背景にある文化の米国との違いの大きさを思わずにはいられません。司書課程とは何か、図書館専門職の養成とは日本においていかに取り組まれるべきか、大きな問いが、残っています。

しかし、今号には、図書館と司書の現在と未来を深く考えるきっかけを提供してくれるであろう、本年度に司書課程が主催した行事の記録を2本、掲載することができました。冒頭の、公開シンポジウム「逸脱する図書館」記録と、公開シンポジウム「ドイツの図書館思想」記録です。さらに、豊島区立図書館から、豪華にも3人の職員の方がご指導にいらしてくださいました、図書館実習事前指導講義録「公立図書館の現場から」、そして埼玉県立図書館、本学のビジネスデザイン研究科、司書課程の連携事業の報告として、埼玉県立図書館の長谷川優子氏よりご寄稿いただいた「ビジネスデザイン研究科との連携に学ぶ」、さらに兼任講師の折田洋晴先生にご寄稿いただいた研究ノート「ピアス・バトラー『図書館学序説』を読み直す」も、図書館と司書の過去、現在、未来を考えることにつながる内容です。ぜひ、学生たちの真摯な学びの報告に合わせまして、お読みください。

中村百合子
(立教大学司書課程主任)